

調査報告 一〇〇―三

実践女子大学所蔵

源氏物語古筆切目録稿 (三)

横
井
孝

例言

本稿は、本誌各号ごとに（伝称）筆者別に古筆切を収載する。

掲載内容は、国文学研究資料館編『古筆への誘い』（三弥井書店、二〇〇五年三月刊）に準拠し、「鑑定」「書誌」「本文」「筆者」「解説」の項目をあげた。次に各項目について、同書より摘記する。

〔鑑定〕 「極札・正筆書・裏書・箱書など、当該切を鑑定した諸資料の記載を掲げ、可能な限りその図版を挙げた。鑑定印については、（琴山）（守村）など丸括弧内に印文を示したが、解説不能箇所には■印を付した」

〔書誌〕 「当該切の縦横の寸法……料紙などについて、基本的な書誌事項を記した」

〔本文〕 「当該切の翻刻本文を掲げた。……なお、解説不能箇所には■印を付した」

〔筆者（伝称筆者）〕 「……極札など鑑定によるものについては《伝称筆者》としてその名を掲げた」

〔解説〕 当該切の特色、ツレの存在などについて略述する。

〔参考〕 本目録の新設項目。当該古筆切について直接間接に言及した文献を明記し、詳細な検討はそれに譲ることとする。

なお、本号には冒頭に「源氏物語梗概本」「源氏物語古系図」のミニ特集として、各三点ずつまとめて掲載した。また、横井「源氏物語古筆切事始——筆者不明の断簡を読む」（『実践国文学』第九〇号、二〇一六年一〇月）に紹介した無銘の古筆手鑑中の断簡のうち、やや目を惹くものから数点を本稿末尾に取り上げた。

〔二三〕 冷泉為相 六半切（源氏物語梗概本）

〔鑑定〕 極札・オモテ「冷泉殿為相卿たるわさとにや（「拜」黒）」

ウラ」 （「壬／申」黒）（「茂入／道順」黒）」

〔書誌〕 縦一七・五cm、横一六・五cm。未表装。

〔本文〕 たるわさとにやそこはかとなく

そある

たき、こるおもひはけふをはしめにて

この身にねかふのりそはるけき

よもすからたうとき事ともうち

あはせたるかくのこゑたえす何事

もけふやみきくへきとちめなら

んとさしもめとまり給ましき事

まてもあはれに身わたされたまふ

まして夏冬のときにつけてもな

〔伝称筆者〕 藤原（冷泉）為相。

〔解説〕 和歌の字頭をあげ、物語本文を低書する形式の『源氏物語』梗概書。『源氏物語大成』一三八四頁2行目

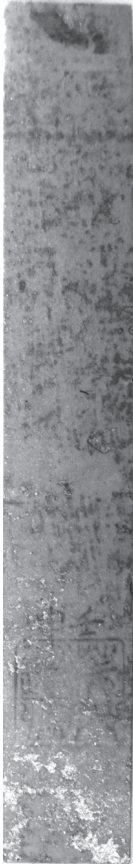
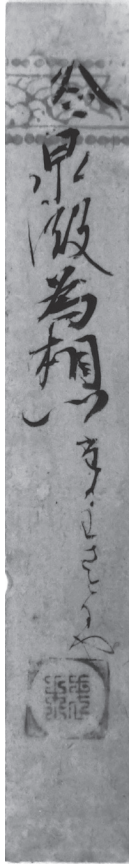
一三八五頁3行目に相当する本文で、御法の巻、紫の上が法華經千部供養を行った際、明石の君に歌を贈る。その返事が「たきゝこる……」である。『源氏物語大成』底本によって現行本文と比較してみると次のような状況が読み取れる。傍線をほどこした部分が梗概として生かされた箇所、パーレン内は断簡の独自異文を示す。

〔……後のきこえも心をくれ〕たるわさにやそこはかとなくそあめる

たき、こる思ひはけふをはしめにてこの世にねかふのりそはるけき

夜もすからたうときことにうちあはせたるつ、み(かく)のこゑたえずおもしろしほのくとあけゆくあさほらけ霞のまよりみえたる花の色くなを春に心とまりぬへくにほひわたりても、千とりのさへつりもふえのねにをとらぬ心地して……としころか、る物のおりにまいりつとひあそひ給人く、の御かたちありさまのをのかし、さへともことふえのねをもけふやみき、給へきとちめなるらむとのみおほさるればさしもめとまるましき人のかほとも、あはれにみえわたされ給まして夏冬のときにつけたるあそひたはふれに(て)もなまいとましき……

これを要するに、本文を刈り込みながら適語をつなぎ合わせて取意としていることが分かる。



〔二四〕 冷泉為相 六半切（源氏物語梗概本）

〔鑑定〕 極札・オモチ「為相卿やなど（式／守」黒）」。

〔書誌〕 縦一七・二cm、横一六・三cm。古筆手鑑に貼付。

〔本文〕 やなといふをきくはいか、あはれ

ならさらむ人もけしきあやし

くやみむとおもへはおくにむかひ

てゐ給へりさてきのふもいみし

うふひんに侍き水のうゑち

かきところにていみしくなき

給てはしらにかきつけ給へりし

とてかたる

みし人のかけもとまらぬ水のうゑに

おちそふなみたいと、せきあへす

〔伝称筆者〕 藤原（冷泉）為相。

〔解説〕 これも「源氏物語歌集」の体裁をとる六半本梗概書の断簡。手習の巻、『源氏物語大成』二〇四三頁2～11行に相当するが、本文を刈り込んだ梗概本。

やせもいふ所もくはりのあはれ
ほろろいふ人も言ふ事や志
くやみひもたもふれくふひえ
て井ぬへかきてきのまとい
うふらん小伝す水乃うき
かきとらるまぐいみしくなま
ぬてたし一羅よかきらむぬ可
とくくの家
あし今乃くむもさぬぬ水たうあは
おらるるおきういさきあへす

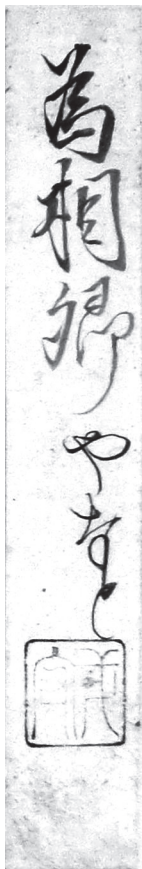
『源氏物語大成』底本（当該巻は大島本）によって現行本文と比較してみると次のような状況が読み取れる。傍線をほどこした部分が梗概として生かされた箇所、パーレン内は断簡の独自異文を示す。

……（いそきせさせ侍なん）やなといふを聞に（は）いかて、あはれならさらむ人やあやしとやみむとつ、ましうておくにむかひてゐ給へりあま君かの聖のみこの御むすめはふたりとき、しを兵部卿宮の北の方はいつれそとの給へはおとりはらなるへしことくしうも、てなし給はさりけるをいみしうかなしひ給ふなりはしめのはたいみしかりきほとく出家もし給つへかりきかしなとかたるかのわたりのしたしき人なりけりとみるにもさすかにおそろしあやしくやうの物とかしこにてしもうせ給けること（さて）きのふもいと（いみしう）ふひんに侍しかな（き）河（水のうゑ）ちかき所にて水をのそき給ていみしくなき給きうへのほり給てはしらにかきつけ給（へり）し（とてかたる）

みし人の影もとまらぬ水の上に落そふ涙いと、せきあへす

これもまた、本文を刈り込みながら適語をつなぐ状況は同様である。

極めは、平塚平兵衛。「弑守」の印記は、天明八年（一七八八）三星屋茂助板「古筆目利名寄極印鑑」、慶応三年（一八六七）板「和漢書画古筆鑑定家印譜」に見えるものではあるが、事績は未詳の由（村上翠亭・高城弘一ほか）「古筆鑑定必携 古筆切と極札」淡交社、二〇〇四年三月刊。現在のところ手鑑貼付のものであるため、裏印は未調査。



〔二五〕 花山院師賢 四半切（松尾切）

〔鑑定〕 極札・オモテ「尹大納言殿師賢卿〔琴／山〕黒」

〔書誌〕 縦二六・九cm、横一三・八cm。未表装。

〔本文〕 ゆふかほ

山かつのかきほあるともおりくにあはれはかけよなてしこの露
あれたるいへの露しけきをなかめてむし
のねにきをへるけしきむかし物かたりめきて侍し

ちしのおと、

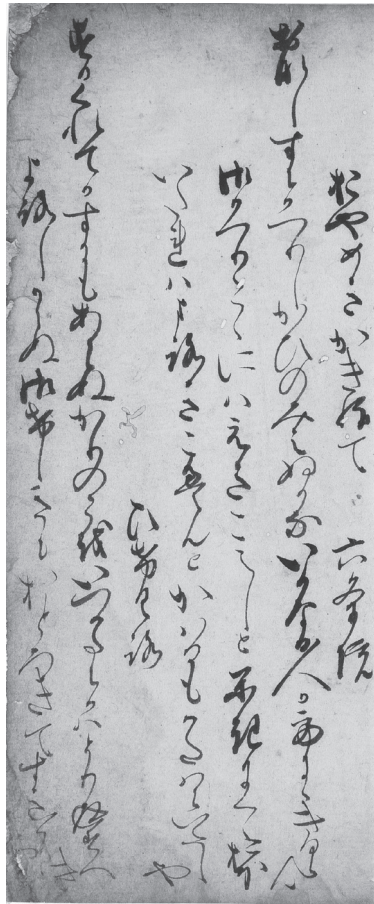
さきまする色はいつれとわかねとも猶とこ夏にしく物そなき

山となてしこをはさしをきて

になとおやの心をとる

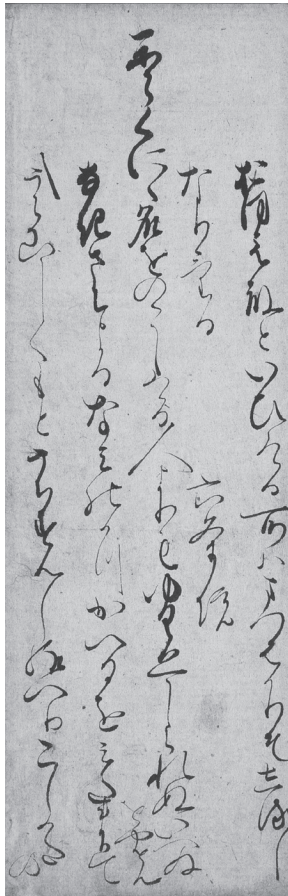
〔伝称筆者〕 藤原（花山院）師賢（二三〇一―一三三二）。内大臣花山院師信の次男。後醍醐天皇の討幕運動に加担し、元弘の乱（二三三二）の折に囚われて配流、下総国で病没した。権大納言・弾正尹を兼任したので「尹大納言」と称す。〔解説〕 いわゆる「源氏物語歌集」（源氏集）のうち、松尾切と呼ばれるものの一点である。『古筆手鑑大成』中の各手鑑、『古筆学大成』等に数多のツレが収録されている。とくに伊井春樹「松尾切（『源氏物語』歌集考——抄出の方法と依拠

本文 付、源氏物語和歌抄切拾遺」(『源氏物語論とその研究世界』風間書房、二〇〇二年一月刊、所収)が総合的研究であり、かつツレの本文の集成をおこなっていて、一連の切の研究として抛るべきものとなっている。ただし、伊井論文の初出は一九九六年七月(『本文研究・第一集』和泉書院刊)であり、その後にもツレの発掘が進んでいる。



田中登編『平成新修古筆切資料集』第一集・第三集(ともに思文閣刊)所収の断簡から二点、参考図版として次に掲げておこう。

右の断簡の寸法は、縦二七・五cm、横一一・三cm、左の断簡は、縦二七・三cm、横八・八cm。



〔二六〕 二条為氏 巻物切（源氏物語古系図）

〔鑑定〕 極札・オモテ「二条家為氏卿明石中宮（養／心黒）」

ウラ「切 任二（神田道伴「朱）」

〔書誌〕 縦二九・八cm、横一七・〇cm。未表装。

〔本文〕 明石中宮 母あかしのうへ入道前播磨守女

みをつくしの三月十六日あかしのうらにて

むまれ給松風には、うへにくして京への

ほりてかつらのさとにすみ給しをうす

くもに六条院へむかへたてまつりて

むらさきのうへやしなひたてまつり

たまふふちのうらには今上春宮へまいり給

て淑景舎ときこえきみのりに中宮と見

えたり

〔伝称筆者〕 二条為氏（二二二～二二八六）。藤原為家の長子。二条家の祖。『続拾遺集』の撰者。播磨国細川荘の領有をめぐって阿仏尼と争ったことで知られる。

〔解説〕 もと卷子本の古系図。「入道前播磨守／女」とあるが、為氏本・正嘉本は表記を異にしつつもほぼ同じく、

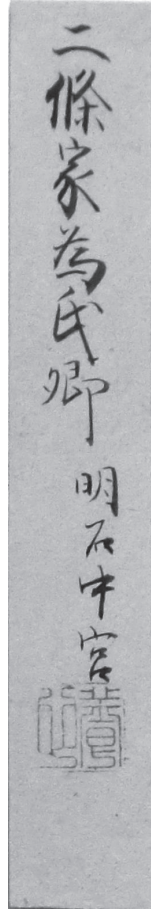
明石中宮

母ありしれえ
女
入道前橋磨守

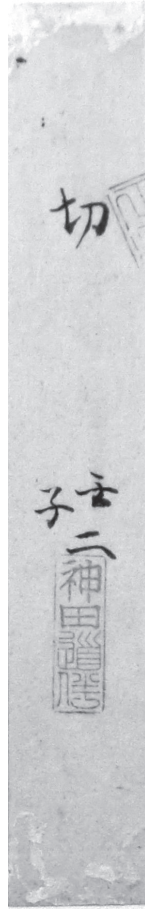
大坂の三月十日ありしれえにて
ひまね松風よりうらやま京井
かちていけいれこもすみね城の子
らもに六条院へひらきまほりて
ひまねありしやうからしそまにり
ちまよひありしれえ春字へまほりね
て津島合はまははははは中宮是
いなり

九条家本は「明石の入道女」とする。また、注記本文一行目「三月十六日」は為氏本のみ見え、九条家本・正嘉本になし。三行目「六条院へむかへたてまつりて」は為氏本・正嘉本に見え、九条家本は紫の上養育記事の後に「六条院へわたり給」とする。また、七行目「淑景舎ときこえ」も為氏本・正嘉本に見え、九条家本になし。同行末「中宮と見えたり」の後、正嘉本「わかかなに東宮をうみ奉る」とあり、当該断簡との差異を見せる。漢字・かなの表記を除けば、極めの伝称のとおり「為氏本」の本文と一致する。

極めは、神田道伴。



（表）



（裏）

〔二七〕 冷泉為相 卷物切（源氏物語古系図）

〔鑑定〕 極札・オモテ「冷泉殿為相卿以上二人（「琴／山」黒）」

ウラ 「雲紙切^乙六（「了延」黒）」

〔書誌〕 縦二七・五cm、横八・六cm。未表装。

〔本文〕 以上二人源氏三条宮の御なやみのとふらひ

にまいる給へりし日致仕のおと、とひき

つれて出あひ給し人々ほかはらの公達也

葵上 母致仕大臣におなし

きりつほのまきに源氏にあひ給葵卷に

夕霧大臣をうみおきてほとなくかくれ給

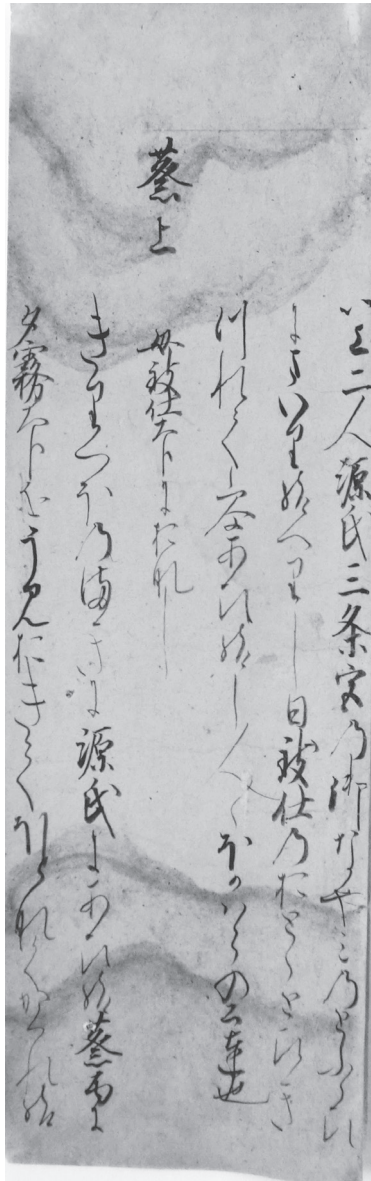
〔伝称筆者〕 冷泉為相。


〔解説〕 本号の研究所彙報、「編集後記」にも触れるように、二〇一六年の歳晩、久下裕利氏（昭和女子大学教授）より寄贈された、一連の物語切のなかの一点。

筆跡・打曇の料紙・寸法等からみても、久曾神昇『源氏物語断簡集成』（汲古書院、二〇一〇年二月刊）第八図の伝為相筆（寸法「二七・六糎×一七・二糎」とツレであろうし、『古筆学大成』第二四卷所収の伝藤原為家筆源氏物語古系図（二）もまた一連のものである。「たて二七・七センチメートル、よこ二〇・〇センチメートル」「鎌倉時代に流行した後京極流の筆致で、比較的小さな字粒を流麗に運んでいる」とある。

『古筆学大成』は、人物配列が「伝二条為氏筆本に完全に適合している」とするが、注記をみれば、九条家本「源氏北方／は、おと、にをなし」……夕霧の大将をうみをきてほとなくうせ給ぬ」、為氏本「母致仕のおと、にをなし／ゆふきりのおと、の母也」「きりつほの巻に十六にて源氏君は十三にてくゑんふくし給し夜よりあひそめ給ふ……」、「正嘉本「母致仕の大臣に同」「きりつほの巻に源氏にあひ給ふ葵巻にゆふきりの大臣をうみをきて程なくかくれ給ふ」とあり、本文は正嘉本と一致する。

極めは古筆家第七代・了延。



冷泉教為相卿 上二人


(表)

雲次切 乙亥六


(裏)

〔二八〕 堯仁法親王 卷物切（源氏物語古系図）

〔鑑定〕 極札・オモテ「妙法院宮堯仁親王かけるふの（「養／心」黒）ウラ」切 子七（「神田道伴」朱）」

〔書誌〕 縦二九・三cm、横一四・九cm。未表装。

〔本文〕 かけるふの巻にうせ給ふよし見ゆかほる大将のおち

といへりあかしの中宮も軽服にてとあるは源氏院
のおと、なるへし

侍従 母もとの北方

宮君 母同

ち、君うせて後ま、母のせうとの馬頭けさうしける
を中宮いとをしくきこしめしてむかへとり給て

明石一品宮の御かたに宮の君とてさふらはせ給き

〔伝称筆者〕 堯仁（二三六四～一四三〇）。後光厳天皇第六皇子。妙法院門跡。一品法親王。良憲僧正の資、至徳元年（一三八四）天台座主に補せらる（「諸門跡譜」）。第一四二・第一四九世座主（『天台座主記』）。

〔解説〕 『古筆学大成』には伝堯仁筆の古系図を二種あげるが、（一）はもと雲紙の卷子。当該断簡は（二）に属し、ツレとして藤井隆・田中登『続国文学古筆切入門』（和泉書院、一九八九年四月刊）、田中登編『平成新修古筆資料集・第一集』（思文閣出版、二〇〇〇年三月刊）に各一点をあげる。

つひらの妻よりきぬふりしるのぢりつちのぢり
とらりわしれ中まを祓服してあり源氏に
乃ぢりたる也

侍従

母の書

宮君

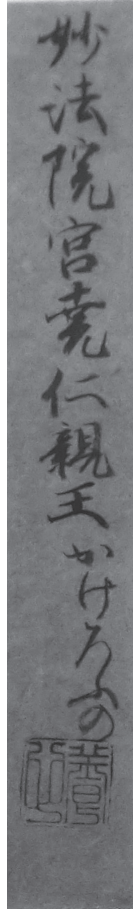
母曰

ちりきせくは母のせりこの馬に守りしる
よ中まいしるきりしるせじりしる
ゆ右一おまの由りしるしるせり

極札

「かけろふの巻」云々は蜻蛉式部卿宮の注記。一行目、九条家本・為氏本古系図は「うせ給える」、正嘉本「うせ給」。二行目「源氏院」、九条家本「源氏の院」、為氏本・正嘉本「源氏」とする。当該断簡の「侍従」の項、九条家本は欠、為氏本・正嘉本は同。

「宮君」の項、「うせて後」は諸本「うせ給てのち」とする。また九条家本は「ま、母のせうと……むかへとり給て」の一文を欠く。為氏本・正嘉本は、漢字・仮名の表記を除けば断簡に同じ。



(表)



(裏)

〔二八〕 藤原家隆 四半切（藤裏葉の巻）

〔鑑定〕 極札・オモチ「大納言家隆なにとかや」（■「金」黒）

〔書誌〕 縦二二・四cm、横五・〇cm。古筆手鑑に貼付。

〔本文〕 なにとかやけふのかさしよかつみつ、

おほめくまでもなりにけるかなあさましと

あるをおりすくしたまはぬはかりをいか、

〔伝称筆者〕 藤原家隆（一一五八～一二三七）か。『新古今和歌集』の撰者。権中納言・藤原光隆の次男。ただし、「大納言家隆」は不審。光隆男の「家隆」は、元久三年（一二〇六）従四位上にて宮内卿に任ぜられたのち、承久二年（一二二〇）宮内卿を止め正三位、嘉禎元年（一二三五）には従二位に昇叙し、同年末に出家しているため、大納言の経歴はない。〔解説〕 『実践国文学』第九〇号で紹介した古筆手鑑のなかの一葉。藤裏葉の巻、葵祭の際、内侍所からの使者として藤典侍が選ばれたのに対して、夕霧がその労をねぎらう場面。「なにとかや」の歌は夕霧の詠。『源氏物語大成』一〇〇九頁3～4行目に相当する。諸本異文の少ないところで、依拠本文の判定はできない。

前記、横井「源氏物語古筆切事始——筆者不明の断簡を読む」にふれたように、この断簡を収める手鑑は「在原朝臣業平」筆伊勢物語切のような珍品をも収載する一方で、「小野道風」（八九四～九六七）の極めのある『源氏物語』須磨の巻断簡が、他では世尊寺行能筆として知られる古筆切のツレであることが判明したことがあるように、極め自体はあてにできぬものがあるが、断簡自体は古いものも収めているため、検討の材としてここに供することとした。

〔二八〕 藤原為家 六半切（薄雲の巻）

〔鑑定〕 極札・おもて「為家卿めくと（琴／山黒）」

〔書誌〕 縦一五・一cm、横一五・五cm。古筆手鑑に貼付。

〔本文〕 めくとくる、まてをはす

はかくしき方のにそみを

はさる物にてとしのうちゆ

きかはる時くのはなもみち

そらのけしきにつけて

心のゆくこともし侍りにし

かな春のはやし秋野、の

さかりをむかしよりとりくくに

あらそひ侍りけるをまた

〔伝称筆者〕 藤原為家。

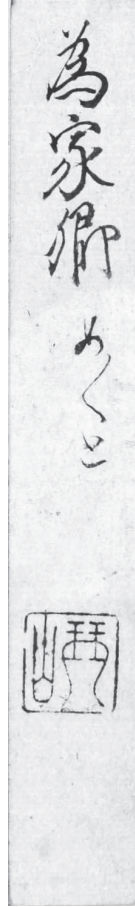
〔解説〕 前項と同じ手鑑のなかの一葉。薄雲の巻、二条院に退下した齋宮の女御のもとに居座った源氏が、春秋論争のきっかけをつくる場面。『源氏物語大成』六二七～六二八頁3行目に相当する。

断簡2～3行目「のそみをは」の部分は河内本・別本と同じく、定家本系は「のそみを」とする。7行目「春のはやし」も河内本・別本と同じく、定家本系「春の花のはやし」とする。

あつらひのつらきものなるを
さうりくしう方乃こをんを
りくちゆをさうのうちゆ
まゝのまゝのくちゆのまゝ
ちゆのまゝのくちゆのまゝ
このまゝのくちゆのまゝ
いづれ春乃まゝ秋野の
まゝのまゝのくちゆのまゝ
あつらひのつらきものなるを

8行目「さかりをむかしより」は、定家本系の肖柏本・三条西家本、河内本系諸本「さかりをなむむかしより」、別本の伝為氏筆本「さかりをむかしより」として「むかしより」をミセケチにする。同じ定家本系でも明融本・大島本・池田本・東山文庫本・幽齋本・公条本などは「さかりを」のみ、別本の陽明文庫本「さかりなる」とする。

9行目「あらしひ」は河内本、別本の伝為氏筆本と同じく、定家本系諸本、別本の保坂本・国冬本・麦生本・阿里莫本は「人あらしひ」とする。総じて当該断簡は、河内本もしくは別本の本文と見るべきだろう。



〔二九〕 今川了俊 四半切（伊予切）

〔鑑定〕 極札Aオモテ「今川了俊 かしくく」〔琴／山「黒」〕

ウラ「切 庚子十〔了音「黒」〕

極札Bオモテ「今川了俊 伊豫守貞世入道
かしくく人」〔節／義「朱」〕

〔書誌〕 縦二七・〇cm、横二〇・八cm。未表装。

新へくはむひのいせはけしきし
 日てはしつうをきくくはくくはく
 五行大義云 以男為爵の女は年堤に礼
 け外母の御今トス
 女をきくやわらふらひ
 ちりてくあやじのあはれ
 するた物けさくえんあはれ
 ちりてくあはれして我のま
 ちりてくあはれして我のま

〔本文〕 かしこく人になひかぬいと心つきなき

スクヨカ
健 菅家後集

わざ也みつからはかくしくすくよかなら

ぬならひに女はた、やわらかにとり

五行大義云 以男以謂以女為柔女子提之礼
此外女ハ和ヲ本トスヘシ
其心ヲ云也

はつして人々あさむかれぬへきか

さすかに物つ、みしみんなの心々は

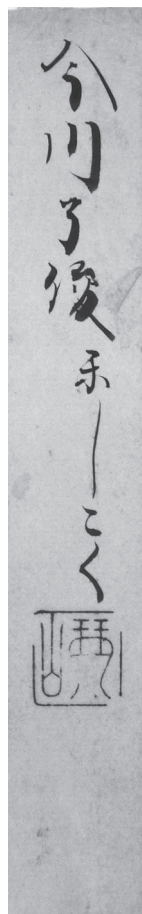
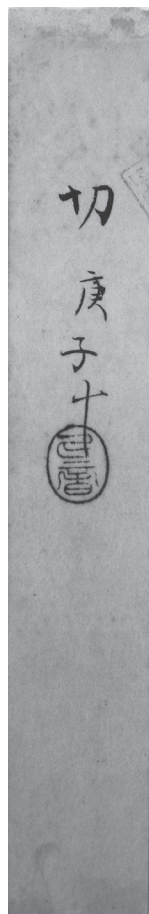
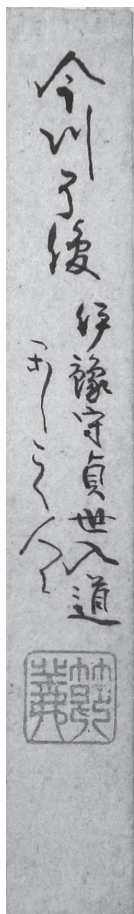
したかはんなんあはれにて我心のまゝに


とりなをしてみむになつかしく思おほゆ

〔伝称筆者〕 今川了俊（二三二六～一四二〇）。俗名貞世、了俊は法名。鎌倉後期から室町初期にかけての武将、守護大名。室町幕府の九州探題、遠江、駿河半国守護に任ぜられる。九州探題赴任中は備後・安芸から九州一円の国の守護も兼任した。歌人としても名高い。

〔解説〕 いわゆる「伊予切」の一葉。『古筆学大成』第三卷に図版二六〇として収められるのと同。また、新美哲彦「今川了俊筆『源氏物語』桐壺・夕顔卷伊予切集成」（『源氏物語の受容と生成』武蔵野書院、二〇〇八年九月刊）に（37）「個人蔵手鑑所収」の断簡として翻刻・紹介されている。

夕顔の卷、『源氏物語大成』一四〇頁14行目～一四一頁3行目までに相当する。断簡3行目「ならひに」、定家本系は「心ならひに」とあるほかはほぼ定家本の本文で、現存の他の伊予切と同様。



手大納言殿 師賢


少のひまふはるもはあゝわえれはきよき
 わきになつての露しき紀とあつてその
 の初しきとつらうしきひりゆらあきん
 りわね
 花山院師賢筆
 少のひまふはるもはあゝわえれはきよき
 わきになつての露しき紀とあつてその
 の初しきとつらうしきひりゆらあきん
 りわね

伝花山院師賢筆四半切（松尾切）

卷上

至二人源氏三条宮乃所
より日波仕乃不
川乃く空ありぬ
女孫住下
まらふ乃由
夕霧下

伝冷泉為相筆卷物切 (久下裕利氏寄贈)